

国立国語研究所学術情報リポジトリ

<講演> 辺境から発信する言語学：
シベリアのコリヤーク語は今

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 呉人, 恵 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000893

辺境から発信する言語学

—シベリアのコリヤーク語は今—

呉人 惠 (富山大学教授)

はじめまして。富山大学の呉人と申します。どうぞよろしくお願いたします。

私の話はこれまでの狩俣先生、菊先生、ペラール先生の取り組んでいらつしやる暖かい地域の言語とは対照的に、とても寒いシベリアで話されている言語についてのお話です。

先ほど始まる前に控室で皆さんとお話をしていたら、与論島では今でも半袖で大丈夫というお話でしたが、私のフィールドは今の季節はおそらくマイナス60度くらいに下がる、とても寒いところです。ちなみに「雪」という単語は与論のことにはないとおっしゃっていましたが、対照的にコリヤーク語では「雪」は降っている雪、積もっている雪それぞれに専用の単語があります。だぶ地理的・気候的に違うのだなという印象を受けた次第です。

しかし、そういう地理的あるいは気候的な違いがあっても、両地域の言語の置かれている状況はかなり共通しています。つまり、両地域とも言語は危機に瀕していると言うことです。

とはいえ、残念ながら私が取り組んできたコリヤーク語という言語は、南の地域の言語よりもずっとドラスティック(激烈)に言語の衰退が進んでいます。同時に、人の生命の喪失という非常に深刻なことも起こっています。

そういう意味で、国外の危機言語ではこういう復興の取り組みが行われているのだという希望のあるお話は、残念ながらコリヤーク語ではできません。

ただ、そうではあるのだけれども、私の取り組んでいるこの小さなコリヤーク語という言語でも、まだまだやることはあるぞというお話はできるのではないかと思います。

シベリアのトナカイ遊牧民コリヤークの言語

さて、今日はシベリアのコリヤークというトナカイ遊牧民の言語を取り上げて、具体的な事例をあげながら、主に次の二点を指摘したいと思います。

まず第一点は、ことばを話す人の立場に立った指摘です。すなわち、言語の衰退というのは単にコミュニケーションの道具が一つなくなることを意味するのではなく、その言語を話す民族のアイデンティティ、生業、さらに深刻な場合には生命の喪失とも密接に結びついているということです。

確かにことばはコミュニケーションの道具だとはよく言われる



①空から見た第13トナカイ遊牧ブリガード



くればちと・めぐみ

富山大学教授
東京外国語大学大学院外国語学研究所修士
博士(文学)
専門は言語学、コリヤーク語学

ことですが、道具であるならば、それは少ないほうが便利でよいわけです。しかし言語というのはそうではないということです。

第二点は、我々言語学者の立場からの指摘です。先ほどペラー先生もおっしゃいましたが、コリヤーク語のような辺境のあまり知られていない言語には、言語研究の視野を広げることができ、興味深い現象が埋蔵されているということです。けれども、今のまま放っておいてしまうと、こういう現象の多くは誰にも知られることなく朽ち果ててしまう運命にあるということです。

さて、私が対象とするコリヤーク語という言語の分布域を、地図上で確認していただきたいと思えます。北海道から北に千島列島、さらにはカムチャツカ半島と続いています。そのカムチャツカ半島の付け根一帯で話されている言語がコリヤーク語です。

私は一九九三年からこれまでカムチャツカ半島の大陸側の対岸にある、マガダン州というところで現地調査を行ってきました。話し手の数は二千人余と言われていますが、おそらく現状ではそれよりもさらに少なくなっていることが予想されます。

話者数の減少に関して一番の問題点は、子どもたちが母語として既にこの言語を習得していないことです。子どもたちが母語として習得していないというこ

とは、既に未来への継承の道が断たれてしまっているというところに他なりません。これは裏返せば、ロシア語への同化が急速に進んでいるということです。

さて、先ほどあげた二点について、今日は具体的な事例

をあげながらご説明したいと思います。まず一つめは、生業の衰退、民族的なアイデンティティや生命の喪失が言語の衰退とどのように相関しているのかという問題です。これについては、トナカイの名づけと人の名づけの伝統と変容という観点から考えてみたいと思います。

二つめは、辺境の危機言語が今後、一般言語学的にどういう貢献をなすのかという問題です。これについては、日本語から発信した「属性叙述」という研究にコリヤークがどのように貢献していく可能性を持つているのかを紹介しながらお話ししたいと思います。

自然資源豊かなシベリア



地図1：宮岡伯人(編)『北の言語：類型と歴史』(1992年、三省堂)

コリヤークが置かれている自然環境は、ツンドラとタイガの移行帯です。ツンドラというのは、一年中永久凍土に覆われ、植生の乏しい平原地帯を指します。一方、タイガというのはシベリアの針葉樹林地帯を指します。私がこれまで調査してきた地域はその移行帯にある地域で、気候区分ではシベリア亜極北



②ツンドラと森林の移行帯

帯です。非常に寒く、気候条件のきわめて厳しい地域です。

たしかに、我々はシベリアというと過酷な自然環境の不毛な土地と思いがちですね。しかし、実は自然資源が非常に豊かです。この

地域の人々は、主たる生業としてトナカイ遊牧を営んでいますが、補完的にフィッシュ

ング、狩猟、植物採集などをおこなっています。このように複数の生業を組み合わせた形は、厳しい自然環境に対処するために、一年中食料確保が可能な環境を作っておくという、この地域の民族ならではの適応戦略のあり方だと思えます。何枚かこの地域の写真を紹介したいと思います。

トナカイの遊牧

写真①は、空から見た第13トナカイ遊牧ブリガードというトナカイ遊牧キャンプの夏の宿营地です。ご覧になっておわかりのように、ツンドラ地帯にはたくさんさんの川が蛇行しているのが特徴的です。

今度は地上から見てみましょう(②)。これは宿营地のすぐ近

くの低い丘から見た写真です。植生がよくわかると思います。コケやベリー類、マツの一種であるハイマツという背丈の低いマツが生えています。そして遠くにはグイマツというカラマツの一種の木が見えます。ツンドラというには植生が比較的豊かですし、かといってタイガほどに森林が密生しているわけではありません。したがって、「ツンドラとタイガの移行帯」と呼んでいます。

ここで人々はトナカイ遊牧を営んでいるわけです。これは夏のトナカイ遊牧の風景です(③)。写真は夏のものが多いです。なぜなら、冬は寒すぎて写真が撮れないからです。これは二人の牧夫がトナカイを捕まえに行っているところです。

これは、トナカイを投げ輪で捕まえているところです(④)。これは、雄のトナカイの去勢作業をしているところです(⑤)。

トナカイ遊牧が主たる生業ですから、トナカイは生活の様々な場面で利用されています。まず第一に、陸上の交通手段として利用されます。二頭立てのトナカイ橇そりが、彼らの主たる交通手段です(⑥)。

写真⑦はトナカイを解体しているところです。トナカイは殺してその肉を食べると同時



③夏のトナカイ遊牧

に、皮を剥いで衣類に利用します。女性二人が両側から引っ張り合って皮を剥ぐのですが、これは力も技術も要するなかなかむずかしい作業です。

剥いだ毛皮は加工して衣類にします。写真⑧は毛皮をミヤマハシノキという木の皮で染めた冬の毛皮服です。コリヤークの人たちはビーズ刺繍を施して仕上げます。手袋、ブーツもすべてトナカイ毛皮で作られています。

夏の衣類もトナカイ毛皮で作られます(⑨)。これはトナカイ毛皮の何で作られているかわかりになりますでしょうか。何かのリサイクルです。ヒントは、あちこち黒くなっていることです。答えは、住居です。そう、写真⑩のテントは、トナカイ毛皮カバで作った夏用住居ですが、これを剥がし、外側についている毛を全部削いで夏用の衣服にするのです。住居の中で煮炊きをし

ますので、煙で燻されて黒くなっているのです。このように燻煙を施されているというのが、水を通さない、蚊を寄せつけないために、夏の衣類としては非常に優れているのです。衣と住をつないだ究極のリサイクルだと思えます。

様々な副業も

先ほども申しましたとおり、コリヤークは複数の副業にたずさわっています。まず写真⑪は秋のフィッシングの様子です。凍った川に穴を開け、そこから魚を獲る、「氷上穴漁」という方法です。魚は釣ったらあつという間に凍ってしまうのですが、人間はこらやって凍った川の上に寝転んで2時間でも3時間でも釣りをしているのです。耐寒性のきわめて高い民族ですね。



④トナカイの捕獲作業



⑤トナカイの去勢作業



⑥コリヤークの交通手段、トナカイそり橇



⑩トナカイ毛皮カバーの夏用住居



⑦トナカイの解体・皮剥ぎ作業



⑪秋の氷上穴漁



⑧ハンノキの樹皮で染めた冬のトナカイ毛皮服



⑫秋のウサギ猟



⑨夏用のバックスキンの服



⑬野草茶用の野いばら摘み



⑭松ぼっくりの採集



⑮ツンドラの幸、ベリー

次に狩猟です(⑫)。これは私ですが、ウサギ猟に同行したときのものです。

次に植物採集。夏になると植物採集をします。これは野いばらをお茶を作るために採集しているところです(⑬)。見てもわかりますように、根っこから採らないで、茎を途中からハサミで切って採集します。根を来年に残すためです。

これはハイマツの松ぼっくりを採集しているところです(⑭)。これも食用にします。

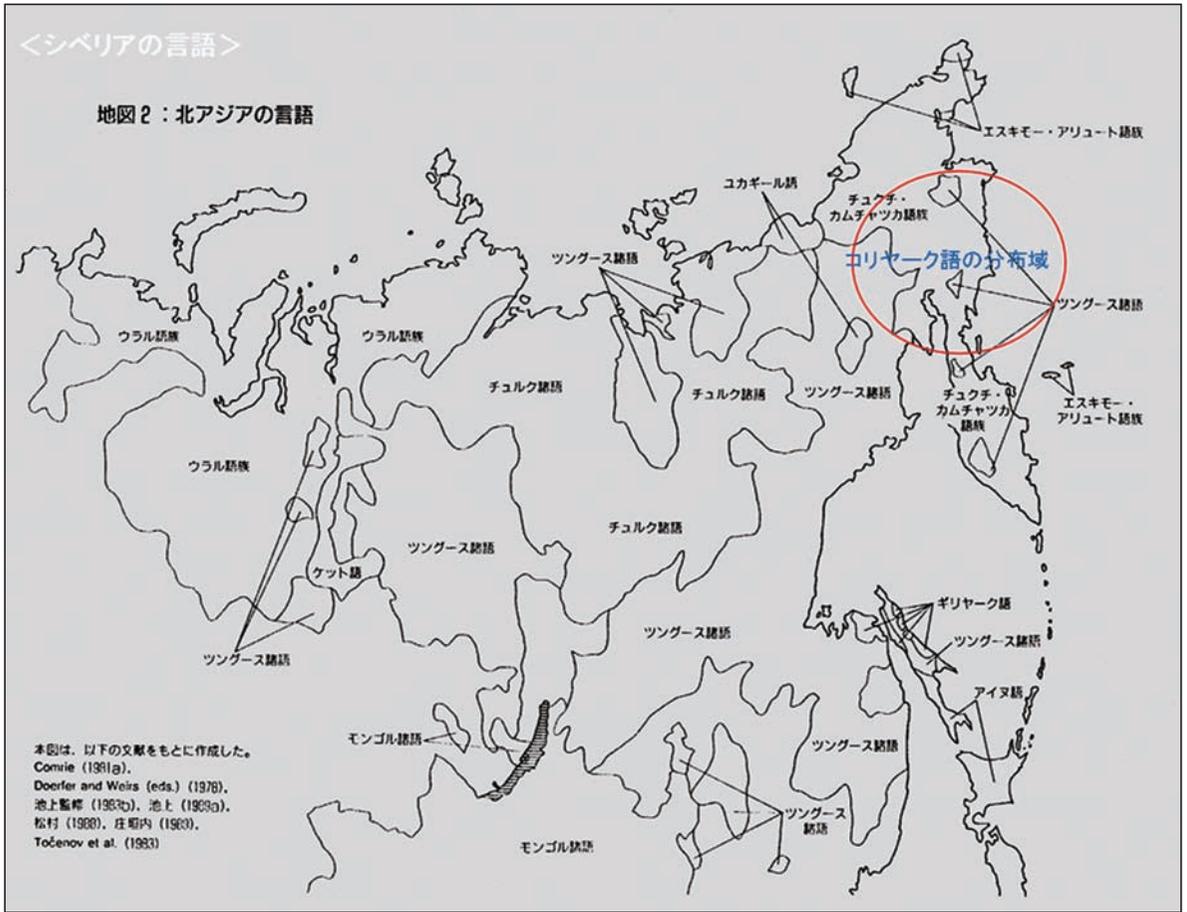
さらに、ツンドラにはベリーが非常に豊かに生えています。右は克蘭ベリー、左はブルーベリーです(⑮)。

以上、コリヤークの人々の生活の一端を写真でお見せしましたが、これだけご覧になっただけでも、シベリアは意外に自然資源が豊かだという印象を持たれたのではないかと思います。

コリヤーク語とはどんな言語なのか

さて、いよいよ言語の話に入りたいと思います。まずコリヤーク語の言語としての位置づけをおきたいと思っています。シベリアには、大きく二種類の言語グループがあると考えていただいきたいと思います。

一つはアルタイ諸語と呼ばれている言語グループです。このなかには満州・ツングース語族、モンゴル語族、チュルク語族といった語族が含まれます。もう一つは古アジア諸語という言語グループです。中にはエスキモー・アリュート語族、チュクチ・カムチャツカ語族、孤立的な言語としてユカギール語、ケット語、ニヴ語が含まれます。かつてはアイヌ語もこれに含まれていま



地図2：宮岡伯人（編）『北の言語：類型と歴史』（1992年、三省堂）

た。コリヤーク語は、このうち、チュクチ・カムチャツカ語族に属しています。

この二つの言語グループのうち、アルタイ諸語はシベリアでは新しい言語だと考えられています。一方、古アジア諸語は、「古」が付いていることからわかりますが、アルタイ諸語が進出してくる以前からシベリアで話されていた古い言語であると考えられています。

この地図を見ていただくと、アルタイ諸語が非常に広い地域を占めている一方で、古アジア諸語は小さな辺境地域に押しやられ吹き寄せられた形で分布しているのがおわかりいただけると思います。これは、シベリアでは新参のアルタイ諸語に古い言語である古アジア諸語が同化吸収されてきたことをうかがわせるものです。

コリヤーク語の現状と特徴

次に、コリヤーク語の現状と特徴について概観しておきたいと思えます。コリヤーク語は先ほども紹介したとおり、ロシア連邦マガダン州とカムチャツカ州で話されている言語です。二〇〇二年現在、8743人のコリヤークの人口のうち27・1%、2000人余の人がコリヤーク語を母語として話しているという統計があります。しかし、この統計から8年も経っていますので、現在では母語率はさらに減少していると考えられます。

地図2でご覧になるとわかるのですが、コリヤーク語はちょうど旧大陸と新大陸のちょうど真ん中辺り、ヒトの旧大陸から新大陸への移動のルートに分布しています。そのことは言語にも反映されています。すなわち、コリヤーク語は旧大陸の言語と似ているだけでなく、新大陸のエスキモー語やアメリカ・インディアン諸言語とも似た特徴をいろいろもっています。

コリヤーク語の興味深い現象は枚挙にいとまがないのですが、ここではそのうち一つだけをご紹介しますと思います。それは、この言語が「能格タイプ」であるということです。

まず、わかりやすいように日本語を見てみましょう。日本語は自動詞文にしろ、他動詞文にしろ、主語は「が」で表します。たとえば「太郎が寝た」「太郎が手紙を書いた」のようにです。つまり、自動詞文でも他動詞文でも、主語につけられる格助詞は同じ「が」で、目的語がこれとは仲間はずれで違う「を」という形式を取るといことです。これに対して能格型では、自動詞の主語と他動詞の目的語が仲間として同じ格形式を取り、他動詞の主語がこれとは違う格形式を取るのです。次の例 (1a) (1b) (1c) を見てください。

(1a) *kamiŋ-a-n* *kujelqetaj*.

子供が (主) 寝ている

「子供が寝ている」(自動詞文)

(1b) *elʼʁa-ta* *kamiŋ-a-n* *ku-ʁejŋew-ŋ-a-nin-Ø*

女が (主) 子供を (目) 呼んでいる

「女が子供を呼んでいる」(他動詞文)

(1c) *kamiŋ-a-ta* *elʼʁa-Ø* *ku-ʁejŋew-ŋ-a-nin-Ø*

子供が (主) 女を 呼んでいる

「子供が女を呼んでいる」(他動詞文)

(1a) の「子供が寝ている」の「子供」の後ろについている語尾 (赤字の部分) に注目してください。これは自動詞文の主語です。次に (1b) の「女が子供を呼んでいる」では、「子供」は他動詞文の目的語になっていますが、(1a) の「子供」と形が同じです。

一方、(1c) の「子供が女を呼んでいる」という他動詞文では、「子供」は主語ですが、今度は (1b) (1c) の「子供」とは語尾が違ってくるのです。この語尾が取る格の形式を「能格」と呼んでいるのです。

このように、自動詞の主語と他動詞の目的語が格標示において同じようにふるまうのに対し、他動詞の主語が仲間はずれになるような言語のことを「能格型言語」と呼びます。能格型言語は実は世界中に散らばっているのですが、なぜかどちらかと言うとマナーな言語が多いため、あまり一般には知られていません。

【言語の死】と【民族の死】

さて、ここから本題に入ります。先ほどからのお話にもありますが、世界中で言語の多様性が失われていると言われています。ただし、言語がなくなってしまうという「言語の死」は、一般的には、即「民族の死」にはつながらないわけです。民族自体は別の優位な言語にシフトすることで生き延びるからです。そのため、生物多様性に比べると危機感が少なく、さほど深刻には受け取ら

表：橿牽引用トナカイの個体名リスト

No.	個体名	意味	由来	年齢・性別
1	ŷeŋətqeŋu	鼻面の白い	同左	6歳去勢
2	ŷenval'kal'ŷe	鼻下が白い	同左	5歳去勢
3	Vicuŷiŋu	下向き切り込み耳印	同左	6歳去勢
4	Pəkjucŷən	なまけもの	同左	6歳去勢
5	Pəkjucŷəʔawwaw	左なまけもの	同左（橿の左側を引く）	6歳去勢
6*	Jaŋjolyən	掘った跡	調教で尻を鞭打ってきた掘ったような傷跡	3歳種
7	ŷel'ŋo	橿用ロープを食べるもの	同左	3歳去勢
8	Poklacayŷiŋən	おなら	おならをするもの	10歳去勢
9	ŷinnəŷin	首	枝角で首をこする	4歳去勢
10	Kəmlilivijicŷən	ネジ	調教用の木の周りをぐるぐる回っていた	2歳種
11	ŷapəkvən	橿の敷物	橿の敷物のようにみずぼらしい	4歳去勢
12	Pamjalŋən	ブーツの下にはく毛皮靴下	毛皮靴下のように太っている	4歳種
13	ŷaŷal	斧	斧のような体型	5歳去勢
14	Wekəŷtŷən	カササギ	カササギのように脇腹が白い	5歳去勢
15	En'ənnəki	コクチマス	コクチマスのように敏速	5歳去勢
16	Qajŷuslik	小ハタリス	Suslik の弟	6歳去勢
17	Suslik	ハタリス	ハタリスのような目	8歳去勢
18	Stjopik	ステパン	エヴェン族のステパンが調教	5歳去勢
19	Kiril	キリル	エヴェン族から贈られたときすでにキリルと呼ばれていた	9歳去勢
20	Jalqəlinəŋ	ユルトの柁木運搬用橿	いつもこの橿を引いていた	4歳種
21	ŷiŋilŋən	トナカイの鼻につける皮紐	他に材料がなかったので、トナカイ毛皮を切っておいた	5歳去勢
22	Kəcyonpən	トナカイが通れないように道に敷く敷物	道の傍らで調教のために木に繋がれていたとき、通りかかった橿を敷物を避けるように恐れた	5歳種
23	Pəŷon	ボタン	服のボタンがついた部分を長く切ってロープ代わりにした	5歳去勢
24	Apakəl'ŷeja	ハイハイの	家畜囲場から這って出てきた	6歳去勢
25	ŷinnəlqən	峠	峠を越え荷物を運搬していた	4歳去勢
26	ŋajŋolŋən	山の斜面	山の斜面でロープに絡まった	4歳去勢
27	ŷeŋətkən	山頂	メスに山頂で交尾した	5歳去勢
28	Pənn'alkən	平らな山頂	平らな山頂で母と休んでいた	5歳去勢
29	Cəventatŷiŋən	分れ道	分れ道で犬と追いかけてあった	5歳去勢
30	Qəcvomkən	ハイマツ林	ハイマツ林に迷い込んだ	9歳去勢

れていないといわざるをえません。

しかし、たとえばコリヤークの現状を見ると、言語の衰退というのは、実は重篤な場合には人の死、生業の喪失とも分かちがたくつながっているのだということを実感します。そこでここでは、トナカイを伝統的にどうやって名づけてきたのか、そしてそれが今どのように変わっているのかという側面から、言語の衰退が意味することについて考えてみたいと思います。

まず、トナカイについて。トナカイはコリヤークにとって非常に重要な家畜ですので、いろいろなトナカイの名称が発達しています。たとえば年齢や性別による識別名称、毛色や毛並みによる

識別名称、それから耳に切り込み印を入れ、所有者がわかるようにするのですが、それも細かい識別名称を持っています。今回、私を取り上げたいのは、橇そりを引くトナカイに与えられる個別の名称、すなわち個体名です。つまり人間に「太郎さん」とか「次郎さん」という名前があるのと同じように、トナカイにも名前があるということですよ。

とはいえ、名前は群れの中のすべてのトナカイに付けられるわけではなく、橇用のトナカイだけに付けられます。群れから選ばれて捕まえられ、調教されて、常に乗り物として使われるという人との関わりの濃さが、個体名を付けるということに反映されているのだと思います。

そして、その個体名の付け方がおもしろいのです。右表をご覧ください。これは私が現地である牧民から聞き取った、彼が管理している橇用トナカイの個体名のリストです。

個体名として一般的に考えられるのは、まずは体の特徴です。たとえば、No.1のトナカイのように鼻面が白いから「鼻面が白い」という名前を付けられる。また、No.2のように鼻の下が白いから「鼻下が白い」という名前が付けられるわけです。それから比喻によって付けられる場合があります。たとえば、No.10の「ネジ」というのは、ネジのようにぐるぐる回るのが好きなトナカイの名前です。またNo.11の「橇の敷物」は、橇の敷物みたいに背中部分が擦り切れているという意味です。

それから人の名前が付けられることもあります。これはちよつと独特ですが、No.18、19ではロシア語の名前が付けられています。コリヤークと隣接するエヴェンという民族がいるのですが、彼らから贈られたトナカイにはロシア語の名前がつけられることがあります。



No.1 ʒeŋətqenju
「鼻面の白い」



No.11 ʒapəkvn̄
「橇の敷物」



No.28 Pənn'alkən
「平らな山頂」

私が一番注目したいのは、No.20〜30までのように、物や地形の名前が付けられることです。たとえば「ユルト」というのはコリヤークの住居ですが、その柱を運ぶ櫓とか、トナカイの鼻のところに付ける皮紐とか、ボタンとかがあります。地形の名前だと、峠、山の斜面、山頂、平らな山頂といったものがあります。

写真をご覧ください。まず、No.1の「鼻面が白い」という名前のトナカイは、実際に鼻面が白いですね。ですから、なるほどそういう名前が付いているのだとわかります。それからNo.11の「櫓の敷物」というのは、櫓にトナカイの毛皮を敷くのですが、人が座っているうちに擦り切れてきます。その敷物のように、このトナカイの背中も擦り切れたようになっていきます。これも、見てすぐになるほどわかります。ところが、No.28のトナカイは「平らな山頂」という名前ですが、どこを見ても「平らな山頂」を想像させる身体的特徴は見当たりません。では、いったいなぜこんな名前を付けるのだろうかということです。

トナカイの名付け〜出来事を名前に刻む

このような名前は、実は、できごとを刻んでいると理解できます。つまり、そのトナカイを飼っている人が実際に目撃した、あるいは関わったストーリーがその名前の背景にあるのです。言ってみれば、名前はのできごとを思い出すための記憶誘発装置というカラベルみたいなものなのだと思います。

たとえば「平らな山頂」というトナカイは、なぜそう名づけられたかという時、群れから逃げ出してしまったそうです。そして、探していたら、平らな山頂の上で母トナカイと一緒に休んでいるのが見つかったそうです。つまり「平らな山頂」という



古い石アーニャペリ (an'apel' : an'a 「おばあさん」 「クモ」, -pel' 「小さい」)



みんな誰かの生まれ変わり！



占いをする老女

は牧畜技術を支える重要なノウハウの一つであるともいうことができます。

人の名づけ〜生まれ変わりの再生観念

次に人の名づけにいきたいと思えます。現代のコリヤークは大きく二種類の名前を持っています。まず、公に使うロシア式の名

名前によって、そのトナカイにまつわる過去のできごとが思い起こされるとともに、そのトナカイが群れから逃げやすく、群れから逃げるときにはいつも母トナカイと行動すること、さらに、逃げる時には、平らな山頂に逃げることに、そういったそのトナカイの生誕に関する情報とか知識というものが想起されるのです。したがって、このような名前

前を持っています。たとえば「Gejko Vladimir Vasil'evich」という知り合いの男の子がいますが、「Gejko」は苗字、「Vladimir」は名前、そして「Vasil'evich」は父称です。その一方、コリヤーク式の名前も持っています。たとえば、この男の子は、なんと5つもコリヤーク語の名前を持っています。ロシア語の名前があればそれでいいじゃないかと思いますが、コリヤークたちは、コリヤーク語の名前を失うことは、自分たちの魂を失うことと同じだと言って、コリヤーク語の名前にこだわります。なぜならば、コリヤーク語の名前には、彼らの人生観が映し出されているからです。

どのようにこの名前を付けるのかというと、アーニャベリという古い石で占って命名するのです。年寄りの女性が木に吊るしたこの古い石の前に座り、祖先の名前を次から次へとやっていくのです。もし、その石が揺れたら、揺れた時に言った祖先の名前が新生児の名前に付けられるのです。

この占いの名づけの背景にあるのは再生観念です。人は死んでもまた生まれ変わるのだという再生観念がその背景にあるということです。祖先の魂をコリヤーク語では「ウージージツト」と言うのですが、この魂が死後、新生児に乗り移り、再生するという信仰があるのです。ですから、この写真の子供たちもみな祖先の名前が付いていて、誰かの生まれ変わりなのです。さきの男の子が5つもコリヤーク語の名前を持っているのは、その占いで正しい祖先を特定できず、何度も繰り返し占いをおこなった結果です。このような占いの失敗は、新生児の身体的な異変として顕現すると考えられています。

廃れゆく伝統的な名づけ

以上、トナカイと人の名づけの両方を見てきましたが、現在、このような名づけに何が起きているのかを最後にご紹介したいと思います。まずトナカイですが、コリヤーク語が話せない若い牧民たちの樞用（すゑり）のトナカイは、今やロシア語からの借用語による名前になっています。たとえば「ムイシヨールノク（仔ネズミ）」、「スニケルス（チョコバー）」、「ボーイング（ボーイング）」、「ストウレロク（弓を射る人）」、「カバン（イノシシ）」などです。

本来、トナカイは種を増やしていくための家畜です。ですから、コリヤーク語の個体名には、そのために必要なトナカイの生態などの知識が埋め込まれていたのです。ところが、コリヤーク語が話せず、またそのような名づけの原理を知らない若者たちは、あたかも愛玩動物に対するかのようなロシア語の名づけに頼らざるを得なくなっただけというわけです。ここでは、個体名をつけるという枠組みだけが残され、その中身である伝統的な命名原理は失われてしまっています。

実際にペレストロイカ以降、トナカイ遊牧が非常に衰退して、トナカイ頭数も激減しました。私に通っているのは、「第13トナカイ遊牧ブリガード」という遊牧キャンプですが、本来あった14のブリガードのうち、今では唯一この第13ブリガードだけが残されています。つまり、上でみたような名づけの変容は、生業の衰退と並行して起きていることなのです。

それから人の名づけの方ですが、トナカイ遊牧キャンプのような伝統的な生業がかるうじて行われている地域ではまだ残っていますが、村ではロシア語化が進んでおり、コリヤークの子どものうちの中には自分のコリヤーク語の名前を知らなくなってしまう

ような子どもがでてきています。コリヤーク語の名前を失うことは、単に自分につけられたラベルを失うということではありません。人は死んでも新たに生き返ることができる、再生することができるという、いってみれば非常に楽観的な世界観、人生観をも一緒に失ってしまうことを意味するのです。

言語の喪失は何をもたらすのか

現にコリヤークの人たちはアルコール中毒や様々な病気などの生命にかかわる深刻な問題を抱えており、若い人たちも例外ではなく、非常に急激に亡くなっています。たとえば私が滞在していた村には二〇〇一年当初60人くらいの住民がいました。それが、今ではおそらく3分の2くらいになってしまいました。若い人も含めてたくさんの方が亡くなっているのです。名づけに見られるような人生観の喪失と、このような事態は決して無関係ではないでしょう。

言語の死と生業の喪失、さらには民族的なアイデンティティの喪失は、このようにすべて並行して起こっているのです。言語とは単なる記号のセットではありません。言語をなくしてしまうということは、その記号にすり込まれている民族固有の知識とか情報なども一緒に失くしてしまうことなのです。さらに言えば、生とか死という人の経験に対する固有の解釈の仕方も失くしてしまうことなのです。非常に恐ろしいことです。

私自身、コリヤークが直面しているそのような急激な言語の変容に今なす術もない状態ですが、一方、言語学者としては、私は未だコリヤーク語に非常に大きな魅力を感じています。なぜならば、コリヤーク語にはまだまだ掘り起こすべき宝がたくさんある

と思うからです。

言語学の見地から考える

一例を挙げれば、所長の影山太郎先生のご研究ともかかわっていますが、日本語研究発信の叙述類型論という理論があります。人間の言語の根幹には、時間軸に沿った出来事を叙述する叙述の仕方と、時間の流れを超越した恒常的な属性を叙述する属性叙述との区別があるという考え方です。

ただ、具体的にそういう区別をはっきりと形の上でする言語は今まで見つかっていなかったのですが、どうやらコリヤーク語にはそれがありそうだとわかってきました。言い換えれば、日本語から発信した叙述類型論という理論研究は、コリヤーク語のデータを通して、世界に発信していく可能性を得つつあると言っても過言ではないと思います。もちろん、このような類型論的研究はスタートラインに着いたばかりですが、コリヤーク語のような小さな言語にも理論研究に貢献する道があるのです。

このように知られていない言語を丁寧に掘り起こしていくことによって、言語学の研究にはより実りある豊かな将来が約束されていることが期待されます。

最後になりましたが、言語話者から見ても、言語学者から見ても、これまで知られることの少なかった言語の消滅は、極めて大きな損失であるということをもう一度強調しておきたいと思っています。やはり、私たちは言語の多様性を守るために精一杯、努力をしていかなければならないと思います。ある言語学者がこういうことを言いました。花は、桜の花でもチューリップでも美しい。しかし、世界中の花が桜の花だけ、あるいはチューリップだけに

なったらどうだろう。本当につまらなくなってしまう。花もいろいろな花があるから美しいのと同じように、やはり言語もいろいろな言語があるから素晴らしいのだというメッセージです。

このなかにも若い言語研究者の方がいらつしやると思いますが、もしその方たちが私に「どんな言語を研究したらよいか」というアドバイスを求めるとするならば、私は、もし日本語であるならば、ぜひ方言の研究をやってほしいと勧めたいと思います。それから外国の言語であるならば、マイナーな言語をぜひやってほしいと勧めたいと思います。以上、ご清聴ありがとうございます。(拍手)

